

2021年8月28日（土）

【聖書箇所】 コリント人への手紙第二 第6章 1～10節

【参加者】 10名

【進め方】 予め聖書に聴き、それぞれが聴いたこと、疑問に思ったことなどを分かち合い、それを受けてさらに思わされたことなどを共有

【分かち合い】

・「神の恵み」とはなんだろうか。一般的には自分にとって嬉しいこと、良い事などポジティブなものと捉えがちだが、違うのではないか。4節以後をみると苦しみがある。ここでは、神様が為すことは全て良い事、全ての出来事が恵みであるというのが、パウロの信仰なのではないか。

→恵みの使者の信仰告白とも言える。パウロはかつて、自分が鞭打つ者であった。それがキリストのゆえに、鞭打たれるものとなった。それをも恵みとして数えている。

・恵みは無駄に受けるということは、どのような事なのであろうか？

→福音に対して反抗的などころとも言えるのではないか。

・アーメン（しかり、その通り）と言えない場所がある。

→パウロがアーメン（しかり、その通り）とってほしい箇所は、以下の2節ではないか。

神は言われます。

わたしは恵みの時にあなたに答え、
救いの日にあなたを助けた。」

確かに、今は恵みの時、今は救いの日です。

- ・すたとんと腑に落ちない。

→本来は、神の言葉は人の人生を変える力がある。人の人生を彫刻刀で削るように形づくる。わからない時は、幼な子のような素直な心で聞き主に尋ね、そして、「神様どうしても教えて欲しいんです。」と神様と格闘すればよい。さらに言えば、みことばを聞くとき、至上のもの、他のなにものにも代え難い、何よりも大切なことと集中し、信賴して聞くことです。

- ・当時のコリントの教会とパウロの関係性を考慮して読むと、より理解がすすむ。

→コリントの教会のある者たちはパウロを軽んじ、使徒の務めを軽んじた。他方、信仰の危機にあった。彼らの頑ななさに愛の手紙を送るパウロです。

- ・どうしても、パウロの歩みを「お手本」として考えてしまう。

→「このようになりましょう」的に聞こえてきたら、間違い。パウロは 1 人の神の僕の姿としての自分を語っている。神とともに働く者、恵みの使者は神のしもべとして推薦します。罪赦され、救われた者として、感謝し、喜んで自分を神に捧げます。神の恵みに在る者の一つのサンプルがここに 있습니다。ここでの主張は「模範」ではなく、恵みに在る者のサンプルということではないでしょうか。

- ・皆さんの言われたことを聞いて、特に 2 節の「今」の永遠性ということが伝道者の書からも聞こえてきたことで印象に残りました。「今、あなたが十字架という高価な犠牲のうえに救われていることを見なさい。」と聞こえてくるように感じます。

「今」の永遠性は、イエスの血による聖めによって聖霊に内に入っていて聖所、あるいは神殿の一部とされている、ということと関係があると思います。黙示録 3 : 12 の「勝利を得る者を、わたしの神の聖所の柱としよう、彼らはもはや決して出ていくことはない。」 21 : 22 の「私は、この都の中に神殿を見なかった。それは、万物の支配者である、神であられる主と、小羊とが都の神

殿だからである。」から、究極的な神の永遠とは、神と御子である神殿の一部となり、時間が続いていく、というより、時間の次元のない永遠と思います。

今、恵みによって神殿の一部としていただいでいて、永遠の神とつながっている、ということを見て、心に深く刻んでいただいで生きたい。人と自分を比べるのではなく、自分に与えられた状況等も含めて恵みから可能な自分の可能性と比べて、恵みを無駄にしないで今日を生きたい、と願い祈ります。